

# 研修のまとめ

～5年 算数科「小数のわり算」～

平成29年8月1日

両津小学校

濱田 紀子

## 1. 本時のねらい(身に付けたい学力)について

図に描いたり、答えの確かめ方を考えたりすることを通して、あまりの意味が分かり、あまりの小数点は割られる数もとの小数点にそろえて付け求めることができる。

文章題から立式できない児童もいることから、普段から4マス図を書かせている。問いや願いが出るまでに時間がかかることから、すぐに筆算で求めた方が良かったと考える。 $2.5 \div 0.8$ と立式し筆算をしたところ、3通りの答えが出てきた。全員が液量図をもとに考え、 $0.8 \times 3$ で水筒3つ分、余りが0.1Lなど、図や筆算の式とつなげて説明させた方が、理解を全員に深められたと考える。

身に付けたい力があまりの求め方であることを考えると、「なぜあまりが0.1Lなのか。」という意味を考える問いを引き出すべきだったかもしれない。

確認問題で筆算を使ってあまりを正しく出し、B評価に達している児童は26人/28人であった。



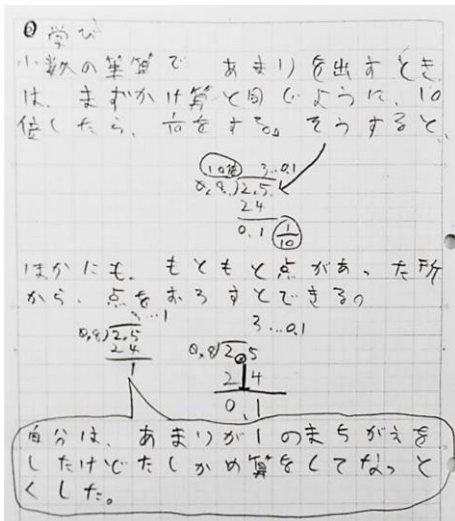
## 2. かかわり合いで、考えの広がりや深まりがあったか

班の中でのかかわりでは、聞き逃してもすぐに班の人に聞いて学習が進められていた。また、筆算で意味を考える児童、液量図で考える児童といたが、友達に図を使って説明したり、友達と同じような考えだと確認し自信を深めたりしていた。

全体でのかかわりでは、あまりが1Lだと思っている児童がいたが、「あまりが1Lだとすると、0.8Lがまだあるから違うと思います。」という意見を聞いて、「あっ、そういうことか。」と気付く児童がいた。班で修正できなかった意見を全体で確認した。



## 3. 書くこと、その他有効であると思われる手立て



液量図を用いたことで、あまりの量感を感じたり、0.1Lであることを理解したりすることにつながった。

ノートに書かれた振り返りからは、あまりの出し方や確かめ算の有効性など書かれたものが多かった。振り返りを書くことによって、本時に身に付けたい力をさらに明確に意識させることができた。

また、班や早く終わった友達とかかわり合うことで、間違いに気付いたり、友達に説明したりできるようになってきた。これからも、子どもたち自身が高め合っているような学習をねらっていきたい。